

2013年7月21日川越教会

## 良い羊飼いキリスト

### 【聖書】 エゼキエル書 34 章 1～5 節

主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、イスラエルの牧者たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか。お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりちりになった。

### 34 章 23～25 節

わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それは、わが僕ダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる。また、主であるわたしが彼らの神となり、わが僕ダビデが彼らの真ん中で君主となる。主であるわたしがこれを語る。わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。悪い獣をこの土地から断ち、彼らが荒れ野においても安んじて住み、森の中でも眠れるようにする。

### ヨハネによる福音書 10 章 14～16 節

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。

### 【序】 国を亡ぼす牧者

私たちは7月に入ってから預言者エゼキエルの預言を読み進めています。彼はエルサレムの神殿に仕える祭司でしたが、**第一次捕囚**の一人として、ヨヤキン王と共にバビロンへ連れて行かれました。**紀元前 597 年**のことです。そして5年目の年にバビロンのケバル川のほとりで祈っている時、神さまから**預言者**として召され、預言活動を始めました。

エルサレムに残って王にされた**ゼデキヤ**も、愚かにも再びバビロンに反逆して、11年目の**紀元前 587 年**にバビロン王の大軍によりエルサレムの都は攻め落とされて廃墟となり、**南王国は滅亡**します。今日の 34 章はその時のエゼキエルの預言です。神の民イスラエルの滅亡は、王以下指導者たちが、主なる神に聞き従わなかった**罪の結果**にほかなりません。群れの羊を大切に養うべき牧者が、贅沢三昧して羊を痩せ衰えさせ、苛酷に支配し、散らしてしまったからです。国の指導者たちが愚かな間違いを犯しますと、国は滅んでしまいます。

私たちの国日本も周辺のアジア諸国を侵略して**大東亜戦争**を起こし、連合軍に打ちのめされて**無条件降伏**の敗北を喫しました。その記念日**8月15日**がやってきます。私が13才の時でした。昭和20年、東京も関西も大空襲で破壊され、沖縄は占領されて25万人の死者を出し、広島・長崎に原爆を投下され、遂に降伏したのです。その時でも陸軍は戦争継続を主張して、**陸軍大臣**が抗議

の切腹をし、宮城を守る近衛師団の若手将校は、司令部に押しかけて**師団長**を切り殺しています。天から**神風**が吹いて、攻めてくる敵を滅ぼし、神の国日本は**必ず勝つ**。天皇陛下のために命をささげて靖国神社に祀られよと、**忠君愛国**の軍国主義教育を叩き込まれていました。

陸軍は長野県の**松代**という山の中の地下に大本営総司令部を作り、天皇・皇后の御座所も用意しました。しかもいざという時に、更に逃げ出す秘密の地下道まで掘っていたのです。私も二度ほど見に行きましたが、東京から避難してきた天皇がそこから一体どこへ逃げ出す予定だったのでしょうか。莫大な金と労力を使って、こん馬鹿げた計画を進めた国の指導者たちの愚かさに、呆れ果てました。東京・関西の大空襲前に降伏すべきでした。どうしてそのような決断を下せなかったのでしょうか。愚かな軍部の独走を抑えられず、自己保身に流されていった国の指導者たち、またそのような指導者に従った私たち国民。日本も敗戦の憂き目を受けるべくして受けたと言わなければなりません。自民党のキャッチフレーズの一つ「**日本をとりもどす**」。一体どのような日本を取り戻そうのでしょうか。戦争の悲劇と敗戦を知らない世代の政治家たちに聞きたいですね。

## [1] 一人の牧者を起こす

**ダビデ王**が、神の民イスラエルの 12 部族を統合して王国を作り上げ、エルサレムに都を定めてからわずか **420 年**で、**ダビデ王朝**は滅亡してしまいました。牧者として立てられた王以下の指導者たちが、主である神さまに聞き従がわず、**神の羊たち**を大切に養わなかったからにほかなりません。

そこで神さまは、エゼキエルを通しておっしゃいました。34 章 11 節以下です。「見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。牧者が、自分の羊がちりじりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す」。「わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う」。

続いて神さまはこうおっしゃいました。23 節以下です。「わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それはわが僕**ダビデ**である。彼は彼らを養い、その牧者となる。また主であるわたしが彼らの神となり、わが僕**ダビデ**が彼らの真ん中で君主となる」。

主なる神さまが立ち上がって、本当の牧者として、神の民である羊を再び集めて養って下さる。そしてご自分の僕として一人の**忠実な牧者**に実際の世話をさせになる——そこまではよいのですが、それがわが僕**ダビデ**だと言われると、どうも首をかしげたくになります。皆さんは如何ですか。確かに**ダビデ**は、稀にみる優れた王でした。でも彼は、忠義な家臣ウリヤを殺して、その妻を横取りした**大変な罪を犯した男**なのです。女性の皆さん、彼を許せますか？ そこで**ダビデ**についての聖書の記事を読み返してみました。

彼はイスラエル 12 部族の中で一番小さな**ユダ族**の中の、羊飼いや一家**エッサイ**の子、しかも8人兄弟の**末っ子**でした。ペリシテ軍との戦争になり、戦場の兄たちに食糧を届けに行き、イスラエル兵たちが恐れおののいている敵の巨人**ゴリアト**との一騎打ちを買って出ました。彼は羊飼いの姿のまま、

杖と石投げ器だけで対決し、一発の石投げで敵の脳天を打ち砕いて、打倒してしまいました。彼は身をもって羊を守る**羊飼いの魂**だけで、強力な戦士に立ち向かったのです。

彼はサウル王に認められて出世していきますが、小さな部族の小さな羊飼いの出身だという心は、国王になっても失わなかったのでしょう。彼は神さまの祝福に対して、「主なる神よ、**何故わたしを、わたしの家などを、ここまでお導きくださったのですか**」「『万軍の主はイスラエルの神』と唱えられる**御名が、どこしえにあがめられますように**」と祈っています(サムエル記下7章)。主なる神さまを恐れうやまう信仰をしっかりと持ち続けていたのです。だから預言者ナタンから不倫の罪を指摘された時も「**私は主に罪を犯しました**」(サムエル記下 12 章)と率直にひれ伏したのです。国王になっても、罪を赦してくださる**神を主として恐れ、聞き従うダビデの信仰が、神さまから「わが僕ダビデ」と認められた**のでしょう。

このエゼキエルの預言「**一人の牧者を起こす**」は、実に 580 年後、ダビデの子孫ヨセフの子として**イエス・キリストが誕生**することで、歴史の中の現実として**成就**することになりました。神さまは真実なお方です。神さまが約束されることは、必ず実行されるのです。しかし良い牧者を起こすという約束は**580 年後**に実現しました。**神の時のスケール**は私たちの常識を超えていますね。私たちは直ぐに結果を求め過ぎます。せっかち過ぎます。もっと長いスケールで、**神の御業**を受けとめていかねばなりません。

## [2] 私たち夫婦の証

先週の月・火曜と北関東連合の牧師会が谷川岳の麓水上温泉で行われ、山下先生と一緒に出席しました。4人の相部屋だったので、若い牧師さん二人とも夜や朝にゆっくり話が出来ました。50年を超える牧師生活をしてきたものですから、つい私の経験話を中心になってしまいました。一人が、奥さんが教会幼稚園の責任を負っていて、母親の苦情に夜まで謀殺され**心身共に疲れ果てている**とこぼしました。

私はふと札幌教会で喜美子が味わった苦労を思い出しました。或る夜の事です。床の中で喜美子がしくしく泣き出したのです。「どうしたの」と声をかけますと、しばらくして黙って結婚指輪を私の手に握らせたのです。心が凍ってしまいました。「どうしたの?」「どうしたの?」と体を揺すって尋ねますと「**札幌教会の牧師夫人をやっていけない**」と小さな声で言うのです。びっくりしました。おとなしくて口数の少ない彼女ですから、教会員とのお付き合いがうまくいかず、苦しんでいたのでしょう。その時私の口からとっさに、「無理なくていいよ。それなら札幌教会牧師を**辞めよう**」という言葉が飛び出たのです。「だって、享さんは札幌教会が好きなのでしょ」「うん、好きだよ。でも僕一人では牧師をやっていけない。いいよ。辞めよう。神さまが僕たち二人でやれる教会をまた与えて下さるよ」

ひとしきり泣いて、指輪をもう一度はめ直してくれました。後で思い直したのですが、喜美子は私の言葉に、「あっ、辞めてもいいんだ」とホッとして、思い詰めていた**心が和んだ**のでしょう。私自身

も、とっさの事なのによくもそんな対応が出来たものだと、自分で自分に驚きました。今の喜美子とは違って、**話すよりも聞くことを好み**、私と出会うまでは修道院生活に憧れていた人でした。

その彼女が長い教会生活の中で、いろいろな方との主にある交わりを通して、**楽しい会話を交わす人**に育てられてきたのですね。ヨハネ福音書 10 章7節以下「イエスは良い羊飼いを」をご覧ください。10 節に「わたしが来たのは、**羊が命を受けるため**、しかも**豊かに受けるため**である」と記されています。イエスさまのもとで養われている**羊の群れ教会**で、喜美子は**豊かに生きる命**をいただいていたのでした。

すると次に「先生は**牧師を辞めたい**と思ったことはありませんか」と質問されました。札幌教会 30 年の間に、天地がひっくり返るような事件が三回起りました。その第一回目の時、牧師としての責任を取るべきだと執事会に**辞表を提出**しました。すると「牧師はいいですね。でも私たち信徒はここに**留まって汚名を拭って**いかなければなりません」と言われました。ハッとしました。私は**逃げ出そう**としていたのです。「御免なさい。一緒に**十字架を担わせて**ください」。すると「**出したり引っ込めたりする**ようなものは、**初めから出さないこと**」と叱られました。有難いですね。第三回目の事件など、教会員が教会員に殺されるという悲劇でした。日本中の TV に私の顔も放映されました。しかし私は辞任せず、遺族のケアはじめ教会の再建に、教会員皆と祈りと力を合わせました。

しかしよく考えてみますと、**牧師そのものを辞めよう**と思い詰めたことが一度ありました。一人の青年が私のデスクの上に手紙を置いて、姿を消したのです。「先生は**強過ぎます**。ついていけません。疲れました。しばらく教会を休みます」。本当によく奉仕してくれていた青年でした。私は自分の分身の一つのように思って、一緒に教会活動をして来たのです。そして彼がそれほど疲れ切って心の中で悲鳴を上げていたことに全く気付いていなかったのです。

私は自分の**感受性の鈍さ**に愕然としました。身近な人の苦しみにこんなに気付かない鈍感さ——これでは**牧師失格**じゃないか！ 打ちのめされました。そして牧師を辞めるべきだと思いつめたのです。新聞に臓器移植の記事が出ていました。せめて腎臓の一つを寄贈した方が、よほど人のお役に立つのではと思いました。しかし喜美子が「肺結核で長い療養をした体で、腎臓一つの子になったら、それこそ十分に働けなくなるでしょう」と泣いて引き止めるので、思い留まりました。以来彼の手紙を肝に銘じて、牧師を続けさせていただいています。

「それでその青年はどうなりましたか？」。自分でも記憶が定かではありませんが、必死にお詫びしたことは確かです。彼は教会内のしっかりとした女子青年と結婚し、とても良い**クリスチャンホーム**を与えられました。私がシンガポールの日本人伝道に召され、第一回の礼拝をわが家の居間で守った時、高校生の長男を連れて北海道からわざわざ出席してくれました。そして今でも北海道連合で中心的な働きをしてくださっています。私も**主イエスさまの羊**として、その手許で長年養い育ていただき、喜美子と同様に**豊かな命**を生きる羊にいただき、更に、主の僕として羊飼いの務め的一端を担わせていただいているのですね。有難いことです。

「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」。「わたしは羊のために命を捨てる」。皆さん、**良い羊飼イエスさま**の許に、どうかイエスさまの**教会の中に留まり、御言葉に養われ続けて生涯をお送りください**。この世の中にイエスさまの許ほど私たちを豊かな命に養い育ててくれる所はありません。**自分の貧しい命に心細い思い**で生きている人が大勢居られます。良い羊飼いのもとにお連れしようではありませんか。

### [結] 世界が一つの群れになる

最後にもう一つ大切な御言葉に注目しなければなりません。16 節です。「わたしには、この**囲いに入っていないほかの羊もいる**。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの**群れになる**。」

これはどういう御言葉でしょうか。自分の教会、自分の国の事ばかり考えてはいけないということです。確かにイエスさまは、自分の囲いの中の羊の一匹一匹をよく知り、大切に養い育ててくださる羊飼いです。豊かな命を受けるようにと、ご自分の命すら十字架につけて死んで、その愛の命を私たちに与えてくださいました。

しかしイエスさまの心はその囲いの中の羊だけに捉われてはおらず、この囲いを超えて、**地の果て、海のかなたに暮す者たち**にまで目と心を向けておられるという言葉です。国家的な狭い了見を超えて、**全ての者たち**に対しても、手許の者たちと**変わらない愛**を注ぎ、ご自分の命を与えて、十字架の愛を受けて**命豊かに**生きていくようにしてくださっているということではないでしょうか。

「イスラム教は悪魔の宗教だ」といって、コーランを集めて教会の前で焼いたアメリカの牧師がいました。すると反米反キリスト教デモが世界各地で起こりました。この牧師はこの御言葉をどのように読んでいるのでしょうか。一方、マザーテレサは、カルカッタの路上で死にゆく貧しい人々を差別せずに取り、手厚く介護をし、お葬式はその人の宗教で丁重に営みました。そして彼女は、この**人々すべて**と天国で再会出来ると信じていました。

イエスさまは、今この囲いに入っていない羊たちでも、**自分の声を聞き分けて**、命を豊かに与えてくれる羊飼いだとして、**従ってくる**と言い切っておられます。「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの**群れになる**」。自分がどのような者であれ、在りのままの自分を、限りなく愛して命まで与えてくださる愛——どんな人でも、そのような**愛の飢え渴き**を心の底に抱いているのではないのでしょうか。ご自分自身を十字架にはりつけにして、世界のすべての人に、豊かな命を生きる者にしてください。愛にこそ、**全世界の人々の心を包んで一つにする力**があると、イエスさまは確信しておられるのです。

自分の教会だけではなく、アジア諸国、遠くアフリカ、中近東、ヨーロッパ、北南アメリカと、世界

諸国の人々を覚えて、少しでもお役に立つよう、祈り求めなければなりません。国内の教会も牧師不足です。でも世界伝道のために、宣教師を送り出すよう、祈りましょう。世界が愛の羊飼いに養われて、一つの群れになるよう、祈り求めましょう。

完